

「豊臣期大坂図屏風」(グラーツ本) 住吉祭の行列

黒田 一充 (関西大学教授 / なにわ・大阪文化遺産学研究センター研究員)

どうもこんにちは。黒田です。今日は私の担当は、解説パンフレット「新発見『豊臣期大坂図屏風』」を広げていただいて、右半分のところになりますけれども、住吉祭りの祭礼、今の堺から続く場面のお祭りの図のところを検討させていただきます。

外国から来られている方がいらっしゃいますが、実は、私の話には翻訳不可能な部分がありますので、日本のお祭り、各種のお祭りの写真で同じような場面がどうなっているかというのをお見せしていこうかと思っております。



黒田 一充氏



図 1

この場面ですね。ご覧ください(図1)。住吉祭りですけれど、大阪の夏祭りの最後を飾るものです。旧暦6月の晦日のお祭りです。現在は7月30日から8月1日にかけて行なわれます。旧暦でいいますと、6月は夏の終わりということになりまして、7月から秋に入ります。夏を越えるということで、夏越しの大祓あらいごのおおはらえい、荒和大祓という言い方を住吉大社ではしてはいますが、要するに夏が終わったので、一つここでお祓いをしようという、そういうお祭りです。

これが茅の輪くぐりをやっている場面です(図2)。これは宵宮のときにやります。本祭りのときは堺の宿院というところへ神輿が行きます。

これは2年前に神輿が復活された写真ですけれども、太鼓橋、反橋の上を渡っている場面(図3)。

この祭礼については幾つかの絵が描かれております。先ほど長谷先生のところで出てきました堺市博物館のもの、寛永年間ぐらいの絵です。

それから、サントリー美術館が持っております、17世紀ぐらいの絵。

それから、もう少し後になりまして、1794年の『住吉名勝図会』、こういうところで幾つか祭りの行列等が描かれております。

ただ、行列の検討をする前に、屏風絵を見ていただいて、私がいくつかちょっと疑問に思ったところを最初に上げておきました。

まず最初は、この住吉大社の社殿なんですね(図4)。社殿が四つ並んでいます。右側が現在の社殿ですけれど、一、二、三殿が縦に並んで、横に四殿がある、要するに、本来の社殿は、L字型になっているんですね(図5)。それがこの絵では少し変です。そういうことが一つあります。



図 2: 住吉大社
茅の輪くぐり神事 (7月31日)



図 3: 住吉祭・神輿渡御 (8月1日)



図 4: 住吉大社の社殿の配置
(「豊臣期大坂図屏風」)

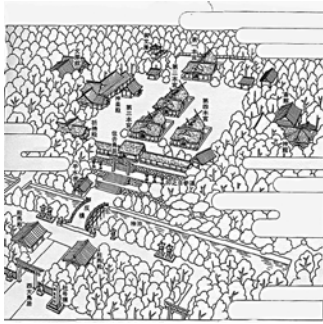


図 5：現在の境内略図



図 6：擬宝珠神輿
(「豊臣期大坂図屏風」)



図 7：鳳神輿
(「豊臣期大坂図屏風」)



図 8：祇園祭の神輿
(舟木家本「洛中洛外図屏風」)



図 9：「住吉祭礼図屏風」(堺市博物館)



図 10：住吉大社の反橋(太鼓橋)



図 11：「四天王寺・住吉大社図屏風」
(サントリー美術館)

それから、2番目の疑問点は神輿です。本来、神輿は四つ出るんですが、ここでは二つになっています。神輿の屋根の紋様、神紋というんですが、ここをちょっと見ていただきたい。キュウリの断面図に見えると思います(図6、7)。

これは「洛中洛外図屏風」で描かれています祇園祭のもので(図8)。祇園の氏子の方がたは7月の祇園祭りにはキュウリを食べないというのがありまして、これはキュウリを食べると神さんの罰が当たる、こういうことを言うわけです。「豊臣期大坂図屏風」の祭行列の神輿の文様が木瓜文に見えるということが、僕の二つ目の疑問点です。ただ、堺市博物館所蔵のものですけれども、後の時代の『住吉祭礼図屏風』では、本来の住吉大社の神紋とは違う紋様が描かれているものもあります(図9)。

もう一つが今の写真、太鼓橋といいますが、住吉大社のシンボルというのは反橋が有名なんです、この太鼓橋と呼ばれるもの(図10)。住吉大社に行かれたことがある方はご存じだろうと思いますが。

横から見たんですけども、この橋の上を渡るというのが大体、住吉社の祭りを描いている場面では有名なんです(図11)。先ほど私が撮った写真もやっぱりあそこが、写真を撮りやすい題材になるわけなんですけれど、このグラーツの屏風は反橋のところを全く渡っていません。

グラーツの屏風の祭り行列なんですが、どこかのお寺みたいなところから出発している(図12)。このお寺が、先ほどエームケ先生がおっしゃっていましたが、四天王寺、あるいは、住吉大社の神宮寺かもしれない(図



図 12：行列が出発する寺院
(「豊臣期大坂図屏風」)



図 13：「住吉祭礼図屏風」(堺市博物館)
住吉神宮寺



図 14：先頭の人物
(「豊臣期大坂図屏風」)



図 15：「賀茂競馬・住吉祭礼図」
(堺市博物館) 猿田彦



図 16：『住吉名勝図会』 猿田彦



図 17：平野・杭全神社夏祭の猿田彦



図 18：「住吉祭礼図屏風」(堺市博物館)
2人の社僧(黒衣の人物)



図 19：神馬・獅子舞・太鼓・住吉踊
(「豊臣期大坂図屏風」)



図 20：三重県志摩市立神
ひっぼろ神事 獅子舞

13)。よくわかりませんが、いずれにせよ、鳥居のところを出発しているということになります。これがちょっとおかしな点です。

そういう点はひとまずおいておきまして、とりあえず順番に行列の中の人物を検討したいと思います。

最初はこの人物です(図 14)。馬に乗った人物なんですけれども、実は、堺市博物館の持っている「住吉祭礼図屏風」とか、サントリー美術館本「四天王寺・住吉大社図屏風」とか、それ以外の絵画資料ではこの人物は先頭に来ていません。普通は、ハナタカとか猿田彦とか言うんですが、鼻の高い人物が先頭になっています。

この「賀茂競馬・住吉祭礼図」もそうです(図 15)。右手の人物が矛を持って乗っています。これが猿田彦。これが『住吉名勝図会』です(図 16)。これも同じですね。

現在の平野の杭全神社のお祭りでは実際にはこういう形で出ています(図 17)。これは人力車に乗っていますが、氏子の方に聞くと、昔は馬に乗っていたらしいですけど、今はこういう形に変わっております。いずれにせよ、こういう人物が馬に乗っている。

ところが、この人物なんです(図 14)。私が思ったのは、これは女性か男性かちょっとわかりにくいということだと思ったんですが、例えば女性だとすると前の赤い部分が扇かなと思ったんですけども、よく見るとどうも袈裟を着ているんですね。ということは、坊さんの可能性があるわけです。

探しますと、『難波鑑』に同じような人物が描かれていて、「社僧ハ茶白笠をきつれて馬にのり」と書いています。社僧というのは、昔は神仏習合でしたので、住吉大社にもお寺がありまして、そこにお坊さんがいました。その坊さんのことを社僧というんですね。この人物がどうも先頭に行っているみたいです。そう考えられます。

今は先頭だったんですが、後の堺市博物館のものでは、むしろ後ろの方へ来ています。黒っぽい服を着ている2人の人物が社僧です(図 18)。同じ格好をしているのでわかるかと思いますが。ですから、一時期、どうもこの社僧が先頭になっていた時期がひよっとしたらあったんじゃないか、それがのちに後ろへ下がってきたんじゃないか、そう考えられます。

続きの人物は、神馬ですね。獅子舞、太鼓、住吉踊が続いている(図 19)。日本の獅子舞はこんな感じですけど、獅子舞は、実は今、住吉祭には出てきません(図 20)。ただ、堺市博物館のお持ちになっている作品の中に1枚だけ住吉祭に獅子舞が出ているのがあるそうです。本来は出てこないんですが、ここでは描かれています。



図 21: 「賀茂競馬・住吉祭礼図」
(堺市博物館) 神官・住吉踊



図 22: 住吉大社御田植神事
住吉踊



図 23: 鳳神輿・剣鉾
(「豊臣期大坂図屏風」)



図 24: 京都市・粟田祭の剣鉾



図 25: 稚児と巫女
(「豊臣期大坂図屏風」)



図 26: 馬上・花笠の稚児
(「豊臣期大坂図屏風」)



図 27: 京都市・祇園祭
上久世駒形稚児

それから、住吉踊りは鎌倉時代の「賀茂競馬・住吉祭礼図」では、こういう形で描かれているものがあるけれど(図 21)、住吉大社の御田植神事では、こんな形で今やっています(図 22)。

鳳神輿が続いて、下にあるのが剣鉾という長い鉾です(図 23)。これは大阪ではあまり出てこないんですけども、京都のお祭りではこういうのが出てきます。粟田祭といって、知恩院の少し北側になるんですけども、大体4メートル近い長さのものが担がれています(図 24)。

それに続いて、稚児、一番右側の馬に乗っているのと、それから巫女、僧が出てきています。前の方では扇を振っている稚児と、それから巫女と、3人が描かれています(図 25)。

順番に見ていきますが、稚児というのは大体こういうふうに馬に乗っている稚児さんが多いです(図 26)。これは祇園祭に出てくるお稚児さんなんですが、神さんがここへ取りつく、シャーマンみたいなものですけども、依りつくシンボルになっています(図 27)。多度大社なんかは、こんな形でほったにちょっとマーキングする、こんなことをやっています(図 28)。それから、粉河産土神社のものとか(図 29)、右側は春日若宮御祭ですが(図



図 28: 三重県桑名市(旧・多度町)
多度大社 肱江の稚児



図 29: 和歌山県紀の川市
粉河産土神社 栗栖のヒトツモノ



図 30: 奈良市・春日若宮祭 馬長児



図 31：『住吉名勝図会』
アハラヤ（平野の阿波羅耶）



図 32：背負われて扇を持つ稚児
（『豊臣期大坂図屏風』）



図 33：三重県伊勢市御菌町
高向神社御頭神事の口取り役の稚児



図 34：『住吉名勝図会』斎（いつき）

30)、こういうお稚児さんが出てくる。大体、祭りの中心になる人物ですけど。

ところが、先ほどのグラーツ本「大坂図屏風」に出てくるのが、堺市博物館の一番古いとされています「住吉祭礼図屏風」では鳥居の下の黒っぽい服を着ている人物ですね。ちょっと格好が違う（図 18）。

ところが、これは『住吉名勝図会』では真ん中あたりの下に「アハラヤ」とルビを振ってあるんです（図 31）。これは「あわらや」か「あはらや」かちょっと読み方がわかりませんが、この人物とグラーツの人物がそっくりで、非常によく似ている。後の時代になるんですけど、そっくり。

アハラヤの文献を調べてみますと、元禄時代の『住吉松葉大記』には、精進潔斎をする、平野から出たということになっています。吉田豊氏・浦井祥子氏の研究では、これは天正年間、1592年に復興されて——もっと前からあったんでしょうね、文禄年間には中絶して、その後、寛文年間、1660年代に途絶えた。先ほどのアハラヤが実写、実際に写生したものであるとすると、ある程度時代が限定される。ということは、慶長年間あたりになるんですけど、そっくり。

それから、次の人物、これは後ろのお稚児さんなんですが、どうも足が浮いていますので、背負われているんじゃないかと私は解釈しました（図 32）。おでこのところに何かイチョウのようなマークがあるんですが、これは、お稚児さんはこういう、いろんな印をつけたりするんですが、それなのか。中世の能面の中に、喝食面といって、前髪がイチョウの形をしたものが少年をあらわす面らしいですけど、そういうものがありますので、どちらかちょっとよくわかりませんが、それらを考えると、どうも少年が担がれて扇を振っているように思われます。

よそのお祭りではこんな感じで、かわいい——これは男の子なんです。女の子に見えますけれど、小さい子がこうやって担がれています。ここもおでこに何かマーキングしています（図 33）。

ところが、後の時代になりますと、このお稚児さんに当たると思われるものが皆、馬に乗っているんです。後の『住吉名勝図会』では、後ろ、右手のほうになります、斎いつきと書かれてある人物が出てきて、これに当たると思われる。これと多分同じものじゃないかと（図 34）。

これは、実は、時代が古いときは7、8歳の少年がやっていた、後の時代になったら女の子に変わったというふうに書かれています。

- ・「斎童ハ赤衣・天冠並ニ檜扇」（『住吉松葉大記』装束部）
- ・「戸方ノ中未ダ陽道ヲ通ゼズ、未ダ忌服ニ遭ハザル童ヲ選ビテ之ヲ立ツ」（『住吉松葉大記』職役部）
- ・「御戸張方ノ未ダ陽道ヲ通ゼザル少年、未ダ忌服ニ触レザル者ヲ扱ビテ斎童ト為ス（中略）天冠赤衣の童」

（『住吉松葉大記』神事部、三月八日条）



図 35：巫女(八乙女)・神官・団扇
(「豊臣期大坂図屏風」)



図 36：奈良市・春日若宮祭 八乙女



図 37：肩車の稚児
(「豊臣期大坂図屏風」)

・「二月四日酉ノ刻 七八歳ノ女子齋 御幸、二月十一月之神事等二七八歳之齋出仕ス」(『住吉年中行事式』)
だから、もとは少年というのが多分一致するんじゃないかと思われます。だから多分、齋ではないかと私は考えます。

次の巫女が出てくるんですが、八乙女という名前と、これは今ではこんな形でお祭りに出てくるということ(図 35、36)。

それから、次に肩車の稚児が出てきまして(図 37)、今はこんな形でお祭りに出てきます(図 38)。やっぱりこれも地面に足をつけないというのが特徴で、足を上げたり、馬に乗ったり、いろんなパターンがありますけれど、そういう稚児が出てきます。

このグラーツ本「豊臣期大坂図屏風」に出てくる稚児は、ほかの絵にも出てきまして、サントリー美術館の「住吉大社・四天王寺図屏風」にも境内のところへ描かれています。

先ほど長谷先生がお見せになった巖島神社でしたか、あの中にも出てきましたね、この人物。アップにしてみると、こういう、全く同じモチーフがここへ出てきます。

それから、これは「賀茂競馬・住吉祭礼図」、ここにも2人の稚児が出ています(図 39)。右側の風流傘のほうがおそらく「大坂図屏風」と同じ人物をあらわし、肩車で担がれているのは父親で、後ろから傘を差しているのは母親じゃないか。そうなるも実は、住吉大社の中の神職の家から出たんじゃないかと、民間から出たお稚児さんの可能性がある。

そこで調べますと、文献の中に出てくるのは田辺という地名がありますが、田辺から小童が出たとあります。それがどうも民間から出た稚児ですから、これに当たるんじゃないかと私は考えます。このモチーフでは、鳥居の右側になります。だから、ずっとこの後の時代までこの人物は出てくるわけです。

これが浜の鳥居のところまで神輿がとまったときに太鼓を打ってぐるぐる3回まわるといふ、その辺を描いていますから、その稚児ではないかと思ひます。

あとは宮司とかが出てきて(図 40)、これも後の時代のものと同一風景で描かれています、他の絵画資料ではこの後ろに反橋が来て、太鼓橋に神輿が来るといふパターンになっていますけれど



図 38：愛知県津島市 津島神社
津島天王祭の稚児



図 39：「賀茂競馬・住吉祭礼図」(堺市博物館)
2人の稚児



図 40：宮司・団扇（「豊臣期大坂図屏風」）



図 41：「賀茂競馬・住吉祭礼図」（堺市博物館）
宮司と神輿

も、ここはちょっと違うということになります（図 18、41）。

かなり急いでいまして申しわけないですが、結論としましては、実は今まで住吉の祭礼図に関しましては、寛永年間とされています堺市博物館が持っているものが、景観図として一番古いというふうには考えられておりましたけれども、どうもこのグラーツに出てくるものはそれより古いお稚児さんの姿が描かれていますので、寛永より前という、慶長とか元和とか、要するに大坂夏の陣の前になるんですね。そのあたりのところになってくる。

ただし、この絵画は実写じゃなくて、先ほどから問題になっていますけれど、どうも元になる祭礼図があったんではないかと。というのは、この行列は住吉大社の境内の描写のいいかげんさに比べて、とても緻密なんです。とてもはっきりと描いています。そう考えますと、元になる祭礼図、絵巻物等の祭礼図巻というんですが、そういうものがモデルとしてあって、それを写した可能性は高いんじゃないかと私は考えます。

実は、祭礼の絵画というのは、京都のお祭りを描いてきました「年中行事絵巻」とか「洛中洛外図」の祇園のお祭りなんかはもちろん古い、15世紀、16世紀のものがあるんですけども、京都以外の町の祭りの図はほとんどないんです。それはもっと後の時代、17世紀以降になってきますので、そういう点でこのグラーツの「大坂図屏風」の住吉祭の場面というのは、非常に古い、江戸時代の初期の絵が描かれている貴重な作例ではないかというのが私の推定でして、発表をこれで終わらせていただきます。

※図版 5 は『住吉大社 改訂新版』（学生社、2002 年）より転載した。

※図版 8 は石田尚豊監『洛中洛外図大観』（小学館、1987 年）より転載した。

※図版 9、13、15、18、21、39、41 は堺市博物館編『住吉大社—歌枕の世界—』（1984 年）より転載した。

※図版 11 は『日本屏風絵集成』第 10 巻 景物画—名所景物（講談社、1980 年）より転載した。